ISSN 2759-0542

京都外国語大学
ラテンアメリカ研究センター
紀要 2025

‹論文›

テワンテペック地峡部におけるメシーカの進出と領域編成
…… 小林致広 1

ブラジル北東部文学と抵抗する女性像
— グラシリアノ・ハーモス著『サンベルナルド』から —
…… 岐部雅之 23

‹研究ノート›

戦前日本におけるモンロー主義をめぐる米州関係に関する文献の紹介
— モンロー主義から米州主義へ —
…… 辻豊治 43

中米地域におけるコミュニティ・ミュージアムと博物館政策に関する研究
— ニカラグアとコスタリカの比較を通じて —
…… 杉岡明日香 59

‹調査研究報告›

Daños al Patrimonio Arqueológico y su Tratamiento Sancionador:
análisis del DS N°005-2019-MC
…… 大谷博則、ホセアントニオ・オノフレ・マイタ 77

‹書評›

A・G・ホプキンズ著(管英輝・森丈夫・中嶋啓雄・上英明 訳)
『アメリカ帝国—グローバル・ヒストリー』
…… 牛島万 101

Vol. 25

〈論　　文〉

テワンテペック地峡部におけるメシーカの進出と領域編成

小　林　致　広*

キーワード

テワンテペック地峡部、テオサポトラン王国、テワンテペック領主国、ミヘ小領主国、ポチテカ交易路

Resumen

La posición de los pueblos del Istmo de Tehuantepec dentro del Imperio azteca sigue siendo incierta debido a la falta de fuentes que indiquen que pagaban tributos. En cuanto a la conquista de los pueblos del Istmo de Tehuantepec desde la década de 1490, las fuentes mexicas afirman que los pueblos conquistados pagaban tributos, mientras que las fuentes istmeñas sostienen que los mexicas buscaban la paz y no se impuso ningún tributo. Las conquistas de Cuatzontlan y Xaltepec en la época de Moctezuma II, tenían como objetivo asegurar y controlar los puntos estratégicos de las rutas comerciales hasta Xoconuchco: la ruta marítima y la ruta tranversal de selva istmeña. Las conquistas de Totontepec y Quetzaltepec en la Sierra Mixe, también tenían como objetivo asegurar los bienes de lujo para las élites mexicas, tales como plumería, joyas y materiales para tallar joyas. Los pueblos conquistados, tales como el señorío de Tehuantepec, los huaves de las lagunas costeñas y los señoríos mixes de la sierra, que no conformaban 'provincia tributaria', estaban indudablemente integrados a los mexicas, y no pueden descartarse como regiones periféricas del imperio.

はじめに

テノチティトランを盟主とする三都市同盟（いわゆるアステカ帝国）の支配領域の広がりに関しては、バーロー（Roberto Barlow）、ベルダン（Frances Berdan）、カラスコ（Pedro Carrasco）らの研究がある。これらの研究では、テノチティトランのメシーカ大領主の貢納収税官（calpixque）が駐留するプエブロを記載したメンドサ絵文書第 II 部（Códice Mendocino, parte II, 以下 CMII と略記）をもとに支配領域が復元されてきた。CMII はメシーカ大領主に貢納していたプエブロすべてを記載しておらず、欠落した貢納地区があることも指摘されている[1)]。多くの非メシーカ系記録には[2)]、CMII に未記載だが三都市の傘下のプエブロがいくつも言及されている。

バーローの研究では、1580 年前後作成の地理的報告書（Relación geográfica）などでメシーカ

＊　神戸市外国語大学名誉教授・京都大学名誉教授

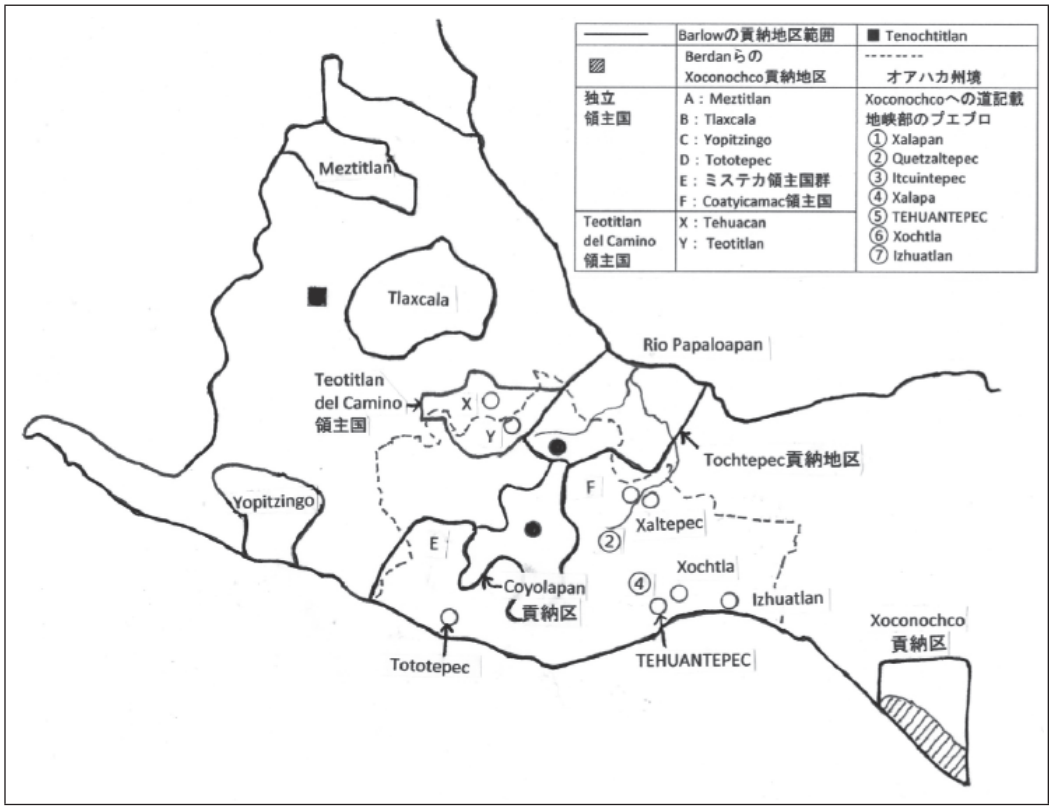
に貢納していたとされるプエブロを加えて、クルア・メシーカ帝国（Empire of the Culhua Mexica）の 38 貢納地区の範囲が推定されている（Barlow 1949）。一方、ベルダンらの研究では、アステカ帝国（Aztec Empire）の支配領域は、CMII 記載プエブロで構成される貢納地区（tributary province）と CMII 不記載だがアステカに服属していたプエブロで構成される戦略地区（strategic province）に分けられている（Berdan et al.1993）。推定された支配領域の広がりはかなりコンパクトなもので、最南端のショコノチコ貢納地区のようにバーローの示したものの 3 割程度にとどまるものもある。一方、カラスコはメシーカ系だけでなく、テスココ系やトラコパン系の史料の比較分析をもとにして、テノチカ帝国（Imperio tenochca）の領域編成は、断片的で均一性を欠くものであったと指摘した（Carrasco1996）。

これらの研究で提示されたアステカの支配領域には、アステカから独立していた領主国（Davies 1987）以外にもいくつかの空白地域が見られる。バーローの地図で目立つ空白地域は、プエブラ・オアハカ州にまたがるテワカン（Tehuacan）谷の「テオティトラン領主国（Señorío de Teotitlan del Camino）」一帯、ならびにオアハカ州南東部に位置するテワンテペック（Tehuantepec）地峡一帯である [3]。一方、ベルダンらの復原地図における空白地域はかなり広く、上記の二地域は貢納地区でも戦略地区でもない「帝国における位置が曖昧な周縁地域（peripheral region of uncertain imperial status）」とされている（Berdan et al.1993:147-148）。

バーローは、「テウティトラン地理報告書（Relación de Teutitlan）」のモンテスマと同盟関係にあるが貢納は納めていないという記述（Acuna 1984:II,198）を踏まえ、テオティトラン領主国はメシーカと同盟関係にある独立領主国と位置づけていた。このテオティトラン領主国の範囲はテワカン谷の中南部に対応し（Barlow 1949:map）、スペイン人到来時にはプエブラ州側にポポルカ系住民のテワカン（Tehuacan）領主国、オアハカ州側にマサテカ系のテオティトラン領主国があったとされる。デービス（Nigel Davies）は、『トラコパン帰属プエブロ覚書』にある三都市への貢納プエブロ一覧 [4]（Memorial 1944:22）に記載されているテワカン、コスカトラン（Cozcatlan）、テオティトランはアステカに貢納していたと指摘し（Davies 1968:15-16）、テワカン領主国は貢納地区だったという仮説 [5] をカステージョ（Noemi Castillo）は提示している（Castillo 2002:66-67）。

バーローの地図のもう一つの空白地域は「ショコヌチコへの道」と命名され、テワンテペック地峡からソコヌスコ地方に至る地域に複数のプエブロが表示されている。これらのプエブロが「失われた貢納地区記録」に記載された可能性は薄く、貢納を納める代わりにアステカ傘下の遠隔地交易商人ポチテカ（Pochteca）の自由通過を認めていたとバーローは推測した（Barlow 1949:99）。ベルダンらが提唱した貢納地区と戦略地区は、帝国に服属していたプエブロが CMII に記載か、不記載かという基準で弁別される領域編成の概念であり、その概念規定に基づけば、テワンテペック地峡部一帯も実際には戦略地区として理解することができる。

本稿の目的は、テワンテペック地峡部でのメシーカの征服活動を帝国の服属プエブロに関する史料だけでなく被征服プエブロ側の立場を語る記録に基づいて整理することで、ベルダンらが提示した枠組みから見逃されてきた帝国の領域編成の多様な側面を解明することである。婚姻関係を通じた同盟関係があったとか、帝国に服属も貢納もしなかったと語られ、アステカ帝国の版図として提示されてきた地図から消されてきたテワンテペック地峡部のプエブロや領主国がどのように帝国へ統合されたかを探りだしたい。



地図１　アステカ帝国の貢納地区（筆者作製）

1. メシーカのテワンテペック地峡部へ進出以前のオアハカ地方

メシーカの征服プエブロを記載したメンドサ絵文書第Ⅰ部（Códice Mendocino, parte Ⅰ：以下CMI）にテワンテペック地峡部一帯のプエブロが登場するようになるのは、アウィツォトル（Ahuitzotl 在位 1486 ～ 1502 年）とモクテスマⅡ世（Moctezuma II、在位 1502 ～ 1520 年）の統治期である。この地域へメシーカが進出する契機となったのは、三都市同盟傘下の遠隔地交易商人ポチテカに対する妨害がこの地域で発生したことである。メシーカの征服活動に関して参照した史料は、表１に掲げた年代記と絵文書類である。

表１　メシーカの征服活動に関する年代記・絵文書類

クアウティトラン年代記 Anales de Cuauhtitlan	テソソモック『クロニカ・メヒカナ』 Crónica Mexicana	イシュトリルショチトル『チチメカ王国史』 Historia de la Nación Chichimeca
トラテロルコ年代記 Anales de Tlatelolco	チマルパイン『第七年代記』 Séptima Relación	サアグン『ヌエバ・エスパーニャ事物誌』 Historia General de las Cosas de Nueva España
ドゥラン『インディアス史』 Historia de las Indias de Nueva España e Islas de la Tierra Firme		メンドサ絵文書第Ⅰ部 Códice Mendocino,parte I（以下CMIと略記）
テレリアノ・レメンシス絵文書 Códice Telleriano Remensis（CTRと略記）	リオス絵文書 Códice Rios（CRと略記）	十字絵文書 Códice en Cruz

表 2　オアハカ州南東地域におけるメシーカの 1486 年以降の征服プエブロ

	アウィツォトル統治期（1486 ～ 1502 年）	モクテスマ II 統治期（1502 ～ 1519 年）
中央盆地	**Coyolapan**（1488）, Huaxyacac（1494）, Mictla, Teotzapotlan（1495）, Tlacuilocan	
南部山地	MIahuatlan, Zolan（1496）	**Quimichtepec**（1512）, **Teuctepec**（1507） **Zentzontepec**, **Zulan**（1508）, Nopala（1512）
北部山地	**Nantzintlan**（**Chiantla**?）	**Atepec**, **Iztitlan**, **Xaltianquizco**（1503） **Yolloxonecuillan**
ミヘ山地	**Tototepec**, **Xaltepec**（1493, 1500）, Totoltepec（1500）	**Quetzaltepec**（1514）, **Zacatepec**, Alotepec（1513）
地峡部	**Amaxtlan**（1497）, **Comitlan**, **Tequantepec**（1502）**Xochtlan**, **Yzhuatlan**, Chiltepec（1498）	**Huilotepec**, Cuatzontlan
ソコヌスコ	**Huehuetlan**, **Huiztlan**, **Mapachtepec**, **Mazatlan**, **Xolotlan**, Acapetlahuacan, Ayutlan, Coyoacan, Xoconochco	**Huiztlan**, **Xoconochco**

太字は CMI 記載、（　　）内は CTR による征服年、（下線）は CTR 以外の年代記による征服年

表 2 は、両者の統治期に征服されたプエブロで、オアハカ中央盆地域のコヨラパン（Coyolapan）貢納地区とパパロアパン川（Río Papaloapan）流域にあったトチテペック（Tochtepec）貢納地区より南東に位置しているプエブロを示したものである。チマルパインの『第七年代記』、『クアウティトラン年代記』、『トラテロルコ年代記』などによると、地峡部の征服活動が展開したのは 1490 年代後半とされている。それに先立つ 1480 年代末から 1490 年代前半にかけては、オアハカ中央盆地域のミステカ系やサポテカ系プエブロに対するメシーカの征服活動が展開していたとされる。モクテスマ II 世統治期になると、オアハカ中央盆地に隣接する南部山地、北部山地、ミヘ山地域における征服活動が目立つようになる。

アウィツォトル統治期の征服プエブロとして CMI に記載されているのは、オアハカ中央盆地域では現クイラパン（Cuilapan）に相当するミステカ系のコヨラパンだけである。その征服は『トラテロルコ年代記』では 1488 年のこととされている。一方 CTR の 1494 年と 1495 年の欄には、サポテカ系のウァシャカック（Huaxyacac）とテオサポトラン（Teozapotlan）の征服が描かれているが、両者とも CMI の征服リストに記載されていない（図 1 参照）。

CTR の 1494 年の欄にある地名絵符はウァシン（huaxin, ギンネムの仲間）の絵符で示され、ウァシャカックを示している。下部のスペイン語注釈には、「ウァシャカ地方（provincia de huaxaca）にあるミクトラ（Mictla）をメシコ人が征服した」とあり、ウァシャカックはミクトラを指すと解釈している。ミクトラはオアハカ市の東 40km にあるミトラ（Mitla）に相当し、「ミキトラ（Miquitla）地理報告書」ではテオサポトラン傘下にあったとされる（Acuña 1984:II,260）。しかしこのウァシャカックは現オアハカ市北郊のフォルティンの丘（Cerro de Fortín）に築かれた要塞の場所である。「テオサポトラン地理報告書」ではモンテスマ（Montezuma）の要塞とされているが、建設時期はアウィツォトル統治期である。この要塞は中央盆地域の軍事的制圧より地峡部やグアテマラ方面への中継基地の役割を果たしていたと上記地理報告書は語っている（Acuña 1984:II,171）。



図 1　1494 ～ 1496 年のオアハカ中央盆地域の征服プエブロ（CTR f.40v）

図像出典：https://pueblosoriginarios.com/meso/valle/azteca/codices/telleriano/telleriano.html

CTR の 1495 年の欄に描かれているサポーテ（zapote）の木はテオサポトランを示す地名絵符である。下部にあるペイン語注釈は、「メシコ人がウァハカ地方の主邑テオサポトランを征服した」となっている。このテオサポトランはオアハカ市の南約 6km に位置する現サーチラ（Zaachila）に相当し、スペイン人到来時には中央盆地域にあったサポテカ系プエブロの盟主的な存在だったとされる。「テオサポトラン地理報告書」は、テオサポトランはメシーカに貢納していなかったと述べている（Acuña 1984:II,171）。

一方、地理報告書でテオサポトラン傘下とされたミクトラ、マクイルショチトル（Macuilxochitl）、テティクパック（Teticpac）などは、スペイン人到来時にはコヨラパンが主邑の貢納地区を構成するプエブロであった。現テオティトラン・デル・バジェ（Teotitlan del Valle）に相当する「テウティトラン（Teutitlan）地理報告書」には、テウティトランは当初はテオサポトランに貢納していたが、その後にテワンテペックに貢納するようになり、スペイン人到来時はミステカ系のコヨラパン（Coyolapan）に貢納していたという記述がある（Acuña 1984:I,331-332）。このことから、中央盆地域のサポテカ系プエブロに対する支配権は、当初テオサポトランのサポテカ系領主にあったが、スペイン人到来時には一部のプエブロの支配権はコヨラパンに移っていたことが分かる。

「クイラパン（Cuylapan）地理報告書」によると、13 世紀半ば頃にミステカ高地からテオサポトラン王から下賜された土地に移住していたミステカ系住民が構築したプエブロがコヨラパンとされている（Acuña 1984:I,165）。この地理報告書によると、コヨラパンのミステカ系勢力はテオサポトラン王の娘と婚姻関係を手掛かりに、徐々にテオサポトランの実権を簒奪していったとされる。その時期は 1440~50 年頃で、テオサポトランの領主権をめぐる内紛でサポテカの一部勢力が本拠をテワンテペックに移動することにも繋がったとされる。

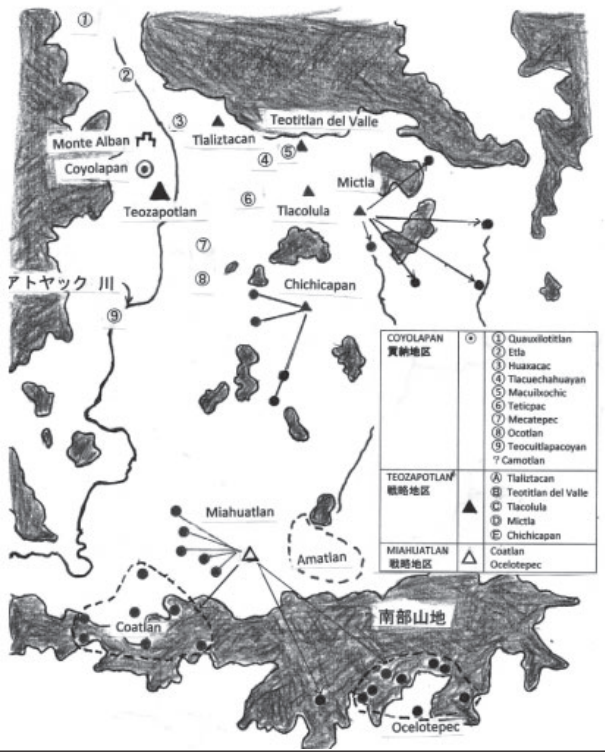
オアハカ中央盆地域の北部にはミステカ系のコヨラパンを主邑とする貢納地区（12 のプエブロで構成）とサポテカ系のテオサポトランを主邑とする戦略地区があり、盆地域南部にはミアウァトラン（Miahuatlan）を本拠とする戦略地区があったと、ベルダンらは指摘している（Berdan et

al.1993:334,336 地図 2 参照）。前 2 者の地区がメシーカに征服されたのは 1490 年代の半ばであるが、南部のミアウァトラン戦略地区が征服されたのはモクテスマ II 世統治期と思われる。

「ミアウァトラン地理報告書」では、ミアウァトランはコアトラン（Coatlan）やオセロテペック（Ocelotepec）と戦争状態だったが、モクテスマ II 世の進出によって和平を結び、モクテスマ II 世に砂金や宝石を貢納し、ウァシャカック要塞に人員を提供することになったという（Acuña1984:I,79）。CTR で 1507 年に征服されたことになっているテウクテペック（Teuctepec）は、『クロニカ・メヒカナ』ではコアトランと同盟関係にあったとされている（Tezozomoc 1997:400）ので、コアトランの征服も同時期と推測できる。ミアウァトラン戦略地区に属するプエブロは 1500 年代半ば頃にメシーカに征服されたが、ミアウァトランの東にあったアマトラン（Amatlan）はウァシャヤックを拠点とするメシコ人と戦い続けていたため（Acuña 1984:I,70）、ミアウァトラン戦略地区には含まれていない。

テオサポトラン王の地峡部への進出に関しては、オアハカ司教区聖職者フランシスコ・デ・ブルゴア（Francisco de Burgoa）の司教区報告書『アメリカ北部地理的記述（Geográfica descripción de la parte septentrional del Polo Ártico de la América）』に次のような記述がある。「この地〔地峡部〕に居住する民族はアンテケラ〔オアハカ〕市の谷にある本拠地から来たテオサポトラン王の軍の末裔で、この地全域を残虐に征服した。･･･この地に居住していたのは南方から来たウァベ（Huave）と呼ばれる人々だった。･･･ 300 年以上前にこの地をサポテカは掌握した（Burgoa 1674:II,362）」。

ブルゴアの著作は 1674 年なので、サポテカ勢力の地峡部への進出は 1370 年代以前から始まっ



COYOLAPAN **貢納地区**

⊙　主邑　Coyolapan
① Quauxilotitlan
② Etla
③ Huaxyacac
④ Tlacuechahuayan
⑤ Macuilxochic
⑥ Teticpac
⑦ Mecatepec
⑧ Ocotlan
⑨ Teocuitlapacoyan
Camotlan ？

TEOZAPOTLAN 戦略地区

▲主邑　Teozapotlan
Ⓐ Tlaliztacan
Ⓑ Teotitlan del Valle
Ⓒ Tlacolula
Ⓓ Mictla
Ⓔ Chichicapan

MIAHUATLAN 戦略地区

△主邑 Miahuatlan
Ⓧ Coatlan
Ⓨ Ocelotepec

●　各地区の服属プエブロ

～標高 2000m

地図 2　オアハカ中央盆地域の貢納地区と戦略地区（筆者作製）

たことになる。テオサポトラン王のコシホエサⅠ世（Cosijoeza I, 在位 1370 ～ 1400 年頃）は、西側のミステカ高地の有力領主と婚姻関係を結びながら、地峡部一帯でも複数のサポテカの入植地を築いたとされる。その後、2 代の統治者を経て、コシホエサⅠ世の息子コシホピⅠ世（Cosijopii I、在位 1440? ～ 1454 年）がテオサポトラン王に就任したが、権力争いに敗れて 1450 年前後にテワンテペックに本拠を移したとされる（Oudijk 2007:113-114）。ラモン・セリス（Ramón Celis）らは、ブルゴア報告書のテオサポトラン王の征服プエブロの一覧をもとに、最も強大だった 15 世紀半ばの支配領域を推定している（Ramón Celis et al. 2024:46）。中央盆地域では 10 プエブロ、東側の地域では 5 つのプエブロが言及されている（Burgoa 1674:II）。最東端に位置するテワンテペック以外の 4 つのプエブロはコシホエサⅠ世統治期に要塞が築かれた場所[6]となっている（Oudijk 2008:106）。

コシホピⅠ世のテワンテペックへの移動とともに、地峡部ラグナ地帯の先住民ウァベ（Huabe, 現在はイコーツ Ikoot）のプエブロへの圧力は徐々に高まり、テワンテペックの西に位置するハラパ（Xalapa）方面でもウァベの人々は追放されたという（Burgoa 1674:II,396）。コシホピⅠ世の孫であるコシホピⅡ世（洗礼名 Don Juan Cortes、ナワトル語名 Yecaquiahuitl,1502 ～ 1563 年）の資産に関する 1554 年の証言によると、祖父のコシホピⅠ世はグアソンテカ（Guazontecas）やイスタカテペケ（Yztacatepeque）の人々を追放し、その土地を配下の人々に分け与えたとされる（Oudijk 2019:227,229,235,239,242）。グアソンテカは現サン・マテオ・デル・マール（San Mateo del Mar）の植民地期の名称グアソントラン（Guazontlan）の人々を指しイスタカテペケは現サン・フランシスコ・デル・マール（San Francisco del Mar）に相当する先住民ウァベのプエブロである。

地峡部ラグナ地帯のウァベ系プエブロは、テワンテペックを本拠とするサポテカ勢力に完全に征服されたわけではない。コシホピⅠ世とウァベ女性ピウシカチ（Piuxicachi）の間にできた子がコシホエサⅠ世とされているように（Oudijk 2007:99）、サポテカ勢力とウァベのプエブロとの間は婚姻を通じた同盟関係が成立していた例もある。テワンテペックを本拠とするサポテカ勢力の支配は、地峡部の東端に位置する先住民ソケの居住地域のイスウァトラン（Izhuatlan）、ニルテペック（Niltepec）などには十分には届いていなかった可能性が高い[7]。

2　地峡部へのメシーカ勢力の進出

『クロニカ・メヒカナ』によると、ポチテカの殺害を受けて組織されたテワンテペック方面への懲罰部隊には三都市同盟傘下の多くのプエブロが参加し、アウィツォトル自身も現地まで赴いたとされる。ポチテカの活動を妨害したプエブロとして、ショチトラン（Xochtlan）、アマシュトラン（Amaxtlan）、ショロトラン（Xolotlan）が『クロニカ・メヒカナ』に挙げられている[8]。これらのプエブロは、テワンテペックとともにメキシコ湾岸のコアツァクァルコ（Coatzacualco）、太平洋岸のショコヌチコ、アヨトラン（Ayotlan）とも同盟を結んでいた（Tezozomoc 1997:323）。メシーカ勢力の懲罰部隊は、ミアウァトランやイスウァトランの先導[9]で、地峡部へ向かって進軍したという（Tezozomoc 1997:325）。実際にメシーカ軍に征服されたのは、テワンテペック、ショチトラン、アマシュトランの 3 プエブロだった。イスウァトランは戦う前からアステカ側に協力し、ソコヌスコ地方のショロトラン方面に進軍する際の先導役となった。クロニカ X 系年代記によると、アステカ軍は圧倒的な軍事力で地域住民の半数を殺害し、上記の 3 プエブロは金や宝石、羽

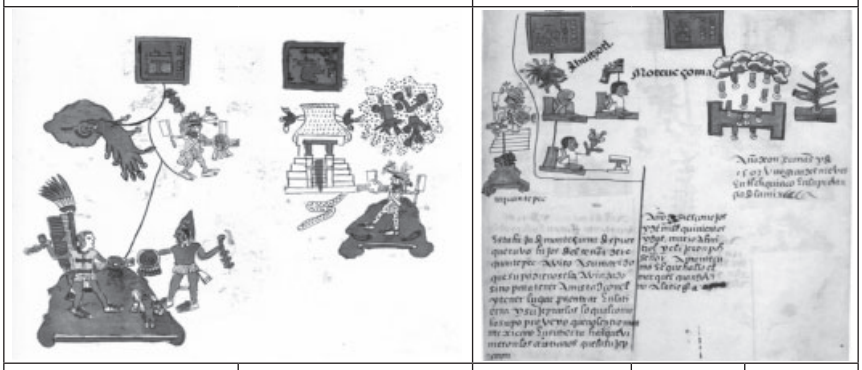
毛製品やジャガー皮などといった威信材をアウィツォトルに納めるようになったという（Tezozomoc 1997:326-328, Durán 1967:II,361）。

一方、サアグンの『ヌエバ・エスパーニャ事物誌』第9巻では、地峡部とソコヌスコ地方の征服が同時期に展開したように語られ、クロニカX系年代記とかなり異なっている。アウィツォトル統治期、アヨトラン・アナワク（Ayotlan, Anahuac）[10] 地方で活動していたポチテカが、クアウテナンコ（Cuauhtenanco）に4年間も閉じ込められるという事態が発生した。ポチテカを包囲したプエブロとしては、地峡部のテワンテペック、イスウァトラン、ショチトラン、アマシュトラン、クアウツォントラ（Cuauhtzontla）と、ソコヌスコ地方と思われるアトラン（Atlan）、オミトラン（Omitlan）、マパチテペック（Mapachtepec）[11] が挙げられている（Sahagún 1988:539-540）。サアグンの記録では、当時トラコチカルカトル（Tlacochcalcatl）という役職にあった後のモクテスマII世が率いる部隊がポチテカ支援のため派遣されたが、援軍部隊の到着時にはソコヌスコ地方南端のアヨトランはすでに平定されていたという（Sahagún 1988:542）。軍事活動がポチテカによって担われ、籠城が4年に及んだこと、支援部隊の到着時にアヨトランが平定されていたなどのエピソードにはかなり不自然なものがある。

クロニカX系年代記では、地峡部の征服とソコヌスコ地方への遠征は連続した事業としては記述されていない。メシーカ勢力に敗北し貢納を納めるようになった地峡部のプエブロは、メシーカに納めるための貢納品を確保するため、ソコヌスコ地方に赴いたという。しかし、ショロトラン、アヨトラン、マサトラン、ショコヌチコは貢納品を提供することを拒み、彼らを殺害したとされる。この事態に対応するため、アウィツォトルが率いる懲罰部隊は、テワンテペックを経由してソコヌスコ地方に向かった。遠征部隊は海岸部のマサトラン、アヨトラン、さらには内陸部のショロトランやショコヌチコなどを次々と制圧していったとされる（Tezozomoc 1997:334-340; Durán 1967:II,383-389）。ソコヌスコ地方の制圧が1497／98年だったことは、メシーカの遠征部隊がソコヌスコから還還した翌年の1499年に起きたメキシコ盆地の大洪水に関する記述が『クロニカ・メヒカナ』にあることからも傍証できる。

クロニカX系年代記で言及されているショチトラン、アマシュトラン、テワンテペックの征服は、チマルパインの『第七年代記』では1497年となっているが（Chimalpahin 1998:II,135）、『クアウティトラン年代記』ではショチトランの征服は1496年、テワンテペックとアマシュトランの征服は1497年となっている（Velázquez 1975:58）。一方『トラテロルコ年代記』では、テワンテペックとの戦いは1497年に始まり、約2.5万のメシコ人が川で溺れて亡くなったという記述がある（Tena 2004:97）。またイシュトリルショチトルの『チチメカ王国史』では、1496年にテワンテペックに派遣されたアステカ軍は手痛い敗北を喫したが、汚名を雪ぐための人身犠牲に必要な捕虜を確保するため、1497年にアマシュトランとショチトランを征服したとなっている[12]。

一方、絵文書記録類でも同様のことが確認できる（図2参照）。CRによると、アマシュトランの征服は1497年、テワンテペックと同盟を結んでいたチルテペック（Chiltepec）の征服は1498年となっている（CR 1900:217）。CRの原版とされるCTRの1501年の欄には、テワンテペックの地名絵符があり、その上に神殿で行われる生贄儀式の様子が描かれている。その下のスペイン語注釈には次のような記述が付せられている。「後にテワンテペック領主との間に子どもを持つことになるこのモンテスマの娘は、父親がテワンテペック領主と友好関係を結び、その土地に入って服属させる目的で娘を嫁がせたということを夫に告げた。それを知った彼は、スペイン人がこの



CR f. 85r		CTR f. 41r		
1497 年 Amaxtlan 征服	1498 年 Chiltepec 征服	（1501 年） Tequantepec	1502 年	1503 年

図 2　地峡部のプエブロ征服を語る絵文書

図像出典 : https://pueblosoriginarios.com/meso/valle/azteca/codices/rios/rios.html
https://pueblosoriginarios.com/meso/valle/azteca/codices/telleriano/telleriano.html

地に到来し征服する時まで、メシコ人が自分の土地に入り込まないよう注意を払ってきた」（CTR f. 41r）

クロニカ X 系年代記やサアグンの記録では、敗北した地峡部のプエブロはメシーカに貢納することになったとされている。しかし 1580 年作成の「テワンテペック地理報告書」には、テワンテペックは戦いに負けることもなく、服属もしなかったと記述されている。「異教時代、この地の人々がおもに戦ったのはメシコ領主モテスマ（Motezuma）[13] といわれる。かのモテスマはテクアンテペック（Tequantepec）地方に膨大な数のメシコ人を派遣したが、この地の住民は勇敢に戦い防衛した。この地の住民はメシコのインディオを殺し、町から 2 レグアの丘にメシコ人の頭だけで防御壁が造られたという。メシコ市に通じる王道に面する丘はかつてこの地の要塞だった。･･･モテスマもメシコのインディオもこの地の住民を服属させられなかった。･･･戦争が終わると、当地に留まっていたメシコ人はソコヌスコやグアテマラ方面に向った」（Acuña 1984:II,114-115）。

これを裏打ちする記述は、ブルゴアの『アメリカ北部地理的記述』のテワンテペック教区の報告にもある（Burgoa 1674:368-369）。コシホエサ II 世率いるサポテコ側は、近郊の丘にある強固な要塞を根拠地に 7 カ月もモンテスマの軍勢の攻撃に抵抗したという。テワンテペック側は優勢に戦いを展開し、殺害したメシコ人の頭骸骨でできた防護壁のことも言及されている [14]。ブルゴアの報告書では、部隊増派にも拘わらず要塞を攻略できなかったメシーカ側は軍事的征服を諦めて、テワンテペック王と婚姻関係を結ぶという「和平協定」を申し出たことになっている。

ブルゴアの報告書では、モンテスマは娘の一人コポ・デ・アルゴドン（Copo de Algodón）をコシホエサ [15] に嫁がせ、テワンテペック王を騙し討ちにしようと画策していたとされる。しかし、ドゥランの『インディアス史』によると、彼女はメシコ兵の待ち伏せをテワンテペック王に告げたため、メシコ兵 1 万人強が殺害されたことになっている（Durán 1967:II, 421-422）。

テワンテペックとメシーカの関係に関する記述は、現地側と帝国側の史料で極めて対照的なものとなっている（Zeitlin 2005:80-86）。クロニカ X 系年代記によると、テワンテペック王は 1502 年に挙行されたモクテスマ II 世の就任式には参列せず、3 章で紹介する反乱を起こしたプエブロへ

の対応を様子見していた。しかし反乱を制圧した後、モクテスマⅡ世がテワンテペックに立ち寄った際には、地峡部のプエブロは以前通りメシーカに服属することを約束したとされる（Durán 1967:II, 421; Tezozomoc 1997:378）。

地峡部のプエブロはCMIIに記載されていないが[16]、『トラコパン帰属プエブロ覚書』では、三都市に貢納していたプエブロとして、地峡部のテワンテペック、ショチトラン、アマシュトランが言及されている。軍事的遠征に物資を提供して貢納が課せられなかったプエブロは必ずしもCMIIに記載されておらず、貢納地区として編成されなかったと、カラスコは指摘している（Carrasco 1996:348-351）。

3　遠隔地交易ルートの確立とミヘ地域への浸透

クロニカX系年代記によると、1502年のアウィツォトル死去とモクテスマII世即位式があった時期に、クアツォントラン（Cuatzontlan）とシャルテペック（Xaltepec）という二つのプエブロが反乱を起こしたとされる[17]。『クロニカ・メヒカナ』は、ポチテカを殺害したこれらのプエブロに対してモクテスマII世は軍を派遣したという（Tezozomoc 1997:371）。一方、ドゥランの『インディアス史』55章はクアツォントランとシャルテペックに関する章だが、クアツォントランは言及されず、イクパテペック（Icpatepec）の征服のことが語られている（Durán 1967:II,417）。

その理由は、情報源のクロニカXの地名絵符に関してドゥランがテソソモックと異なる解釈を採用したためと思われる。『インディアス史』55章の絵文書には、中央水路の左側の4名の兵士の背後の地名絵符には山の絵符に草のようなものが描かれている（図4参照）。ドゥランはこれを「糸（ycpa-tl）の場所（tepe-tl）」を意味するイクパテペックと解釈したのである。しかしイクパテペックの地名絵符は、CTRの1511年の欄（CTR f. 42v）やCMIの征服プエブロ一覧（CMI f. 15v）にあるが、いずれも山の絵符と「糸玉」の絵符で構成され、草のような絵符は見当たらない。それゆえ、ドゥランの『インディアス史』55章の絵文書の地名絵符は、テソソモックのように「毛髪（cuatzon-tli）の場所（tlan）」を意味するクアツォントランを示すと解釈した方がよい[18]。

クアツォントランの地名絵符	イクパテペックの地名絵符	
		
左端クアツォントラン、右端テノチティトランの絵符	山頂と左山麓に糸玉の絵符	山頂に糸玉の絵符
Códice Durán	CTR f. 42v	CMI f. 15v

図4　クアツォントランとイクパテペックの地名絵符

図像出典：https:// aztecglyphs.wired-humanities.org/;
https://pueblosoriginarios.com/meso/valle/azteca/codices/telleriano/telleriano.html

バスケス・チャモロ（Germán Vázquez Chamorro）は、クアツォントランはオアハカ州北東部の現ビジャ・アルタ（Villa Alta）地区にあったと推定している（Tezozomoc 1997:483）。「コアツァコアルコ地理報告書」では、同地区にクアソントラン（Cuazontlan）という地名が見出されるがその場所は不明である（Acuña 1984:I,108）。シャルテペックをミステカ高地の現マグダレナ・ハルテペック（Magdalena Jaltepec）と推定したハッシグは、クアツォントランがその南にあったとしている（Hassig 1988:223）。本稿では、先住民ウァベの言語が植民地期にグアソンテカ（Guazonteca）と呼ばれ、地峡部ラグナ地帯の砂洲にある現サン・マテオ・デル・マールがグアソントラン（Guazontlan）と呼ばれていたこと（Acuña 1984: II,110）に基づき、クアツォントランの場所を現サン・マテオ・デル・マールと同定することにしたい。

アウィツォトル統治期にアマシュトランがテワンテペックとともに征服された際、クアツォントランも征服された可能性は高い。テワンテペックから海路コースでソコヌスコ地方に赴く場合、出航地となるのがテワンテペック川の東側に位置するクアツォントランとなる[19]。1490 年代末のテワンテペック地峡部の征服後もクアツォントランが海路コースで活動するポチテカを妨害したため、再び懲罰行動がとられた可能性があると考えられる。

一方、シャルテペックの征服は、『第七年代記』では 1493 年と 1500 年とされ、2 回目はメシコ人殺害に対する懲罰となっている（Chimalpahin 1998:II,133,139）。『クアウティトラン年代記』ではシャルテペック征服は 1493 年、CR では 1501 年となっている。このシャルテペックの場所に関して、バロス（Alonso Barros）は現ハルテペック・デ・カンダヨック（Jaltepec de Candayoc）にあったと推定している（Barros 2006）。このプエブロは地峡部の北に広がる先住民ミヘ居住域の東部低地のコアツァコアルコス川（Río Coatzacoalcos）の支流ハルテペック川（Río Jaltepec）の中流域に位置している。一方、ガジャルド・バスケス（Gallardo Vásquez）は、シャルテペック領主国の場所はさらに下流のコアツァコアルコ川とハルテペック川の分岐点付近にあったと指摘している。その根拠は 1580 年の「コアツァコアルコ地理報告書」のコアツァコアルコ川絵図で中流の分岐点にシャルテペックが描かれていることである（Gallardo Vásquez 2021:32-34）。1548~1550 年の『視察総録（Suma de vistas）』では、シャルテペックは船で遡行可能なナナカテペック（Nanacatepec）から 5 レグア離れた枝村となっている（García Castro 2013:237,419）。ナナカテペックはシャルテペックとともにサポテカ系領主が統治していたとされる（Chance 1998:31）。

『クロニカ・メヒカナ』で言及されるシャルテペックがハルテペック川の中・下流のいずれにあったかを判断できる材料はない。しかし、シャルテペックがオアハカ州北東部にあったポチテカの需要な中継地トチテペックから地峡部分水嶺を越えて太平洋岸に至る重要な交易ルート沿いに位置していたことは確実である（Gallardo Vásquez 2021:30）[20]。ポチテカの海岸ルートの起点であったクアツォントランと同様、分水嶺越えの主要ルートに位置するシャルテペックでポチテカに対する妨害が起きたことはメシーカにとっては極めて重大な問題だったことは間違いないだろう。

『クロニカ・メヒカナ』によると、クアツォントランとシャルテペックを征服した後、宝石細工に必要な貴重な石[21]を入手するため、約 100 名の使節がケツァルテペック（Quetzaltepec）とトトテペック（Tototepec）に派遣されたが、二つのプエブロはモクテスマ II 世の要請を拒否したという。ケツァルテペックの領主は「自分たちを臣民のように扱うのか。ケツァルテペックと戦ったこともなくその武勇を知らないのに」と激怒し、使節団を殺害、遺体を川や峡谷に遺棄したという（Tezozomoc 1997:380-382; Durán 1967:II,425-426）。その報復のため、モクテスマ II 世はケツァ

ルテペックとトトテペックに軍を派遣することになった。

ドゥランの『インディアス史』によると、遠征には約 40 万人が動員され（Durán 1967:II,427）、アステカの史上最大規模の軍事行動だったという。三都市の王たちが率いた部隊はフアレス山地の現ハルティアンギス（Santa María Jaltianguis）にあたるシャルティアンキスコ（Xaltianquizco）に集合し、二つのプエブロの征服に向かうことになった。『十字絵文書』ではシャルティアンキスコの征服は 1503 年とされているので（Dibble 1942:84）、二つのプエブロへの遠征は 1503 年以降になり[22]、ハシグ（Ross Hassig）は 1505／1506 年頃と推測している（Hassig 1988:227）。

一方 CTR ではトトテペックの征服は 1513 年の欄に記載されている（CTR f.43、図 5）。その下部にあるスペイン語注記は、「この年、8 の家、つまり 1513 年、メシコ人はメシコから 80 レグアの南の大洋にあるトトテペック地方を服属させた」となっている。このスペイン語注記で語られているトトテペックは明らかにオアハカ州南部にある現ビリャ・デ・トゥトゥテペック（Villa de Tututepec）を指している。しかし、CTR のトトテペックを示す地名絵符に描かれた鳥は、CMI でアウィツォトル統治期の征服プエブロとされるトトテペックの鳥の図像や、CMI のモクテスマ II 世統治期の征服プエブロのウィロテペック（Huilotepec）を示す地名絵符に描かれている鳥の図像とかなり異なる。前者は鳥一般を指すナワトル語のトトル（tototl）、後者は鳩・鶉を指すナワトル語のウィロトル（huilotl）の図像だが、CTR の 1513 年の地名絵符の鳥はそのどちらでもない。チマルパインの『第七年代記』の 1513 年にアロテペック（Alotepec）が征服されたという記述があり、チマルパインは CTR のこの絵符をナワトル語でアロトル（alotl）という金剛インコと解釈したことが窺われる。

このアロテペックはミヘの霊峰センポアルテペトル（Cerro Zempoatepetl、標高 3,396m）の東側に位置し、その南東約 10km にケツァルテペックに相当する現サン・ミゲル・ケツァルテペックがある。興味深いことに、チマルパイン『第七年代記』では、翌 1514 年にケツァルテペックの征服があったとされている（Chimalpahin 1998:II,147,149）。チマルパインによれば、トトテペック（＝アロテペック）とケツァルテペックの征服はハシグが想定した 1505／1506 年頃より 10 年近く後に行われたことになる。モクテスマ II 世即位直後とされるトトテペックとケツァルコアトルの征服は、チマルパインの『第七年代記』で語られるアロテペックとケツァルテペックの征服とは別のもので、1514 年のケツァルテペックの征服は 2 回目だった可能性が高い。

CTR 1513 年	Tototepec: 鳥	Totoltepec: 七面鳥	Huilotepec: 鶉／鳩	Alotepec: 金剛インコ
				
CTR f. 43	CMI f. 13r	CR f. 85v	CMI f.15v	CTR　f. 43r

図 5　CTR にある鳥の地名絵符の解読

図像出典：https://aztecglyphs.wired-humanities.org/;
https://pueblosoriginarios.com/meso/valle/azteca/codices/telleriano/telleriano.html

アステカ連合部隊が最初に向かったトトテペックの手前には水量の多いケツァラトル・イテンパン川（quetzalatl ytenpan、澄んだ水の岸辺）があったが、メシーカ軍は葦舟や木の筏、あるいは蔓橋を構築して川を渡り、何重にもめぐらされた防御壁を突破したとされる。トトテペックの神殿に火を放ち、メシーカは 600 名、テスココは 400 名、トラコパンは 350 名を戦争捕虜として確保したという（Tezozomoc 1997:384-385）。その後、ケツァルテペックの攻略に向かうが、構築された幾重もの防御壁を乗り越えるのに何日も要することになった。最終的に 5 つの防御壁を攻略、神殿に火を放ったという。降伏したケツァルテペック側は和平を申し入れ、「カカオ、紙、豪華なマント、最上級の羽毛製品、エメラルドや翡翠、トルコ石などの貴石」を貢納することを約束したとされる（Tezozomoc 1997:387）。

後者のケツァルテペックに関しては、オアハカ州北東部のミヘ山地にある現サン・ミゲル・ケツァルテペック付近にあったプエブロということで意見は一致している。パパロアパン川（Río Papaloapan）の支流プシュメタカン川（Río Puxmetacan）の上流域に位置するこのプエブロの周辺 10km 圏内には、チュスナバン（Chuxnabán）やサンタ・クルスというケツァルテペックの名前がついたプエブロも複数あり、前者にはペロータ球戯場の遺構の存在が確認されている。

一方、トトテペックに関する見解は定まってはいない。トトテペックでよく知られているのは、CTR の 1513 年の欄のスペイン語注記にあるオアハカ州南部の現ビリャ・デ・トゥトゥテペック（Villa de Tututepec）である。このプエブロはスペイン人到来時にメシーカに服属していなかったミステカ系のトトテペック王国（Reino de Tototepec）の主邑であり（Davis 1968:196-203）、候補とはなりえない。トトテペックの候補地の一つは、ゲレロ州南東部のアヨトラン（Ayotlan）戦略地区の主邑とされる現アユートラ・デ・ロス・リブレス（Ayutla de los Libres）の南にあったと推定されている。1548-1555 年の『視察総録』では、アユートラから 3 レグアの枝村トゥトゥテペケ（Tututepeque）にはメシコ人が駐留するモクテスマの要塞があったという（García Castro 2013:65）。このトトテペックの近くにはケツァラパン（Quetzalapan）という集落があり、ベルデ川（Rio Verde）と呼ばれる大河があったとされる（Carrasco 1996:458-459）。もう一つの候補はオアハカ州の北東域のトチテペック貢納地区にあったとされるトトテペックだが、近隣にケツァルテペックという地名の存在は確認できない。

トトテペックに関しては、オアハカ州北東部ミヘ山地に位置するトトンテペック（Totontepec）の誤記ではないかという説がある。アステカ独立領主国の研究の先鞭をつけたデービスは、トトンテペックという地名はトトテペックと同じものと判断し[23]、ケツァルテペックやシャルティアンキスコという関連地名が近隣にあることを踏まえ、トトテペック＝トトンテペック説を主張した（Davies 1968:199）。このトトンテペックはミヘの霊峰センポアルテペトルの北側にある現トトンテペック・ビリャ・デ・モレロス（Totontepec Villa de Morelos）行政区に相当している。ブルゴアの報告書ではトトンテペックはミヘ王国（nación de los mijes）の主要なプエブロだったとされている（Burgoa 1674:292）。この仮説はオーダイクによって支持され（Oudijk 2000:18）、トトンテペックやミヘに関する近年の民族誌では全面的にこの説が採用されている（Bernal Alcántara y Molina Domínguez 2021:110-112）。ガジャルド・バスケスは、トトンテペック近郊に筏で渡るほどの大河がないことから、トトンテペック説を全面的に支持はできないとしている（Gallardo Vázquez 2021:60-63）。

本稿では、モクテスマ II 世の即位直後に征服されたトトテペック（＝トトンテペック）とケツァ

ルテペックはミヘ領域にあったプエブロという説を採用することにしたい。トトンテペックから西約 50km に位置するシャルティアンキスコがアステカ連合軍の集合地だったことを考えると、トトテペックのゲレロ州南東部のアヨトラン戦略地区やトチテペック貢納区説は成立しない。ブルゴアの報告書で、サポテカやメシーカの侵略に抗してミヘの神話的王コンドイ（Condoy）がトトンテペックやケツアルテペックでも戦ったことが語られていることもミヘ領域説を補強するといえよう。

チマルパイン『第七年代記』の 1504 年の項目には、「この年メシコではポチテカヨトル（pochtecáyotl）が始まった」という記述がある。チマルパインによると、ポチテカトルはポチテカがアナワックに赴き、インコ、オウム、金剛インコの羽毛を持ち帰り、それを売ることを意味するという（Chimalpahin 1998:II,139）。つまり、オアハカ北部山地の東に広がるミヘ山地のプエブロの征服の目的は、金や宝石、羽毛飾りや獣皮の装飾品などアステカ支配階層に不可欠な威信財を安定的に調達することと、ポチテカの遠隔地交易ルートの拠点を確保することであったことはほぼ確実であろう。

トトンテペク（= トトテペック）やケツァテペックがメシーカ軍に攻略された後も、ミヘ山地に散在していた小規模なプエブロはメシーカの攻撃に抵抗を頑強に続けていたと思われる。そのことは、1513 年のアロテペックへの侵攻や 1514 年のケツアルテペックへの 2 度目の侵攻が示唆している。ミヘ山地に散在していたミヘの小領主国群は、メシーカだけでなく、西に隣接しているサポテカ勢力のたえざる攻撃に晒されていた（Güereca Durán 2025:62-70）。

4. スペイン人到来時の地峡部のメシーカによる領域編成

スペイン人到来時のオアハカ州東南部のプエブロとメシーカ勢力との関係は極めて多様なものだった。15 世紀半ばまでテオサポトラン王が支配していた地域の西に位置するオアハカ中央盆地域と東に位置するテワンテペック地峡部では、アステカ帝国への組み込まれ方も大きく異なる。

スペイン人到来時、テワンテペックに避難していたコシホエサⅡ世はオアハカ中央盆地域の戦略地区の主邑テオサポティトラン領主に復帰していたとされる。1490 年代にテオサポトランがメシーカによって征服された後、テオサポトラン傘下にあったプエブロのうち、テティクパック、テオティトラン、マクイルショチトルなどは、ミステカ系のコヨラパン貢納地区として編成されていた。一方、テオサポトラン戦略地区に残留したトラコルーラ、ミクトラン、チチカパンといったプエブロは、テオサポトラン領主から一定程度自立していたと思われる。

コシホエサⅡ世とメシーカ大領主の娘との間に生まれたコシホピⅡ世は、スペイン人到来時にはテワンテペック領主国の領主として統治していた。テワンテペック領主国の範囲は植民地期のテワンテペック管区（Alcaldía）に反映され、テワンテペック川下流域のサポテカ居住域やラグナ地帯のウァベ居住域だけではなく、東は先住民ソケ居住のチマラパス山地や平原部のプエブロ、さらに西はネシャパまで及ぶとされてきた（Gallardo Vásquez 2021:50）。1554 年に作成されたコシホピⅡ世の資産目録に関する証言によると、コシホピⅡ世や父親（コシホエサⅡ世）、祖父（コシホピⅠ世）が支配していた地域は主邑テワンテペックから 15 レグア（約 60km 強）の範囲内にあったという（Oudjik 2019:25）。実際、彼の資産と認定されたシュチトラン、トラコテペック（Tlacotepec）、アマティトラン（Amatitlan）、チルテペックなど 7 つのエスタンシア（付属村）は



～標高 2000m

オアハカ盆地域	北部山地		地峡部	
Coyolapan 貢納地区 Teozapotlan 戦略地区 Miahuatlan 戦略地区 Amatlan 独立領主国	Ixtepexi 戦略地区	Ixtepexi ① Yoloxonecuilan ② Atepec ③ Xaltianquizco	Tehuantepec 領主国 15 世紀入植地 ⊥（要塞）	Tehuantepec Xochtla Ⓐ Tlacotepec Ⓑ Chiltepec Ⓒ Xalapa Ⓓ Guevea Ⓔ Petapa Guiengola Nexpa
	ミヘ 小領主国	④ Alotepec ⑤ Quetzaltepec ⑥ Totontepec ⑦ Xaltepec	ウァベ系	Amaxtlan, Guazontlan (=Cuatzontlan) Ⓕ Itztactepec Ⓖ Tepecuazontlan
Tototepec 独立領主国			ソケ系	Izhuatlan Ⓗ Niltepec Ⓙ Tapanatepec Ⓚ Zanatepec
	Xaltepec 領主国		チョンタル系	Tequisistlan

地図３　スペイン人到来時のオアハカ州南東部の領主国の分布（筆者作製）

いずれもテワンテペックから 50km 圏内に位置していた[24]。この狭義のテワンテペック領主国にせよ、植民地期のテワンテペック管区に相当する広義のテワンテペック領主国にせよ、その領域内での主邑と付属村との空間的配置は、ベルダンらの提唱した「戦略地区」のものと何ら変わりがない。

西側のテオサポトラン領主と東側のテワンテペック領主の支配圏の境界に関してははっきりしない。15 世紀半ばにサポテカが入植したゲベア（Guevea）やペタパ（Petapa）などが 1490 年代末にメシーカに征服されていたかは不明で、スペイン人到来時にどちらの領主国に服属していたかも不明である。同じことは、テオサポトラン領主国とテワンテペック領主国の中間に位置していたテオサポトラン王の構築した要塞があったネシャパなどに関しても言える。二つの領主国の

中間に居住していたテキシストラン（Tequisistlan）などチョンタルの人々もメシーカ勢力や二つのサポテカ領主国からある程度独立していたのではないかと推定できる。それはテワンテペック領主だったコシホピII世がペドロ・アルバラド軍に協力してハラパやテキシストランを攻略したことから推察できる（Van Doesburg 2022:37）。

地峡部ラグナ地帯のウァベ系のアマシュトランとクアツォントランはモクテスマII世統治期以前にメシーカに征服されたが、スペイン人到来時のメシーカとの関係は不明である。テワンテペック領主のコシホピII世ことドン・フアン立会いの下に1542年に作成された『課税簿（Libro de tasaciones）』によれば、グアソントラン、テペグアソントラン（Tepeguazontlan）、イスタクテペック（Itztactepec）はテワンテペックに貢納する義務を有していたという（González de Cossío 1952:372-376）[25]。これはスペイン人到来前の関係ではないが、地峡部ラグナ地帯のウァベ系のプエブロがテワンテペック領主に貢納を納める形で服属していたことはスペイン人到来前から続いていたと思われる。

地峡部ラグナ地帯の東に位置するソケ系のプエブロは、狭義のテワンテペック領主国への服属の度合いは低かったと思われる。15世紀半ばのテオサポトラン王の支配領域にイスウァトランやニルテペック（Niltepec）は含まれていたが、イスウァトランはメシーカといち早く同盟関係を構築することでメシーカの征服を免れていたが、その傘下にあったことは否定できない。15世紀半ばのテオサポトラン王の支配領域に含まれなかったサナテペック（Zanatepec）やタパナテペック（Tapanatepec）なども、スペイン人到来時のテワンテペック領主国には属していなかったと思われる（Trejo 2004:22）。

ミヘ山地やフアレス山地を含むオアハカ北部山地の「サポテカ地域（Los zapotecas」）の地理報告書は遺失している。しかし南隣りの「ネシャパ（Nexapa）地理報告書」では、ケツァルテペックとシロテペックケ（Xilotepec）はミヘ居住地域として言及されているが、先スペイン期に関する情報は皆無である。それゆえ、モクテスマII世即位後からメシーカの征服活動が展開するようになったミヘ山地のプエブロとメシーカ勢力がどのような関係にあったかはよくわかっていない。スペイン人到来時、ミヘ山地一帯には約30の小領主国が存在していたとされる（Gallardo Vásquez 2021:64）。しかし、そのなかにモクテスマII世即位直後に征服されたトトンテペックはあるが、チマルパインの『第七年代記』で1513年と1514年にメシーカ勢力に征服されたアロテペックとケツァルテペックは含まれていない。ミヘ側の記録ではメシーカへの抵抗や貢納を拒否したことが強調されており、ミヘ山地の小領主国はメシーカから一定程度の独立を保っていたと見なすことができる。

ミヘ山地の西のフアレス山地に位置するイシュテペヒ戦略地区を構成するサポテカ系プエブロは1510年代に征服の対象となった。イシュテペヒの先祖がヨロショネクイラン出身でモンテスマに貢納したという「イシュテペシック（Ixtepexic）地理報告書」の記述（Acuña 1984:I,238,240-241）に依拠して、ベルダンらはアテペック（Atepec）、イツティトラン（Iztitlan）、シャルティアンキスコ、ヨロショネクイラン（Yoloxonecuilan）などを戦略地区の構成プエブロとした。その判断基準は、ほぼ同じ時期に征服された南部山地域のミアウァトラン戦略地区に適用されたものと同じである。

おわりに

メシーカ征服後の状況に関する十分な史料がない地峡部のプエブロは、貢納地区や戦略地区ではなく帝国の「周縁地区」であると、ベルダンらは位置づけていた。ベルダンらが提起した戦略地区の基準は、政治的な従属関係の有無というかなり曖昧なものだった（Berdan et al. 1993:111）。戦略地区と提示された領域は、貢納徴収官が配備された貢納地区のように「均質的に編成された空間」ではない。急速に支配領域が拡大していった 1490 年代以降、帝国の縁辺部で征服されたプエブロの場合、帝国の統治体制へ統合が十分に展開されたとは考えにくい。反乱などで不通となった遠隔地交易ルートの確保、貴重な資源獲得の名目で征服された地峡部やミヘ山地域のプエブロの多くは、基本物資や威信材確保のための貢納徴収官が配置されて貢納地区として編成されることはなかった。

軍事遠征への物資・人員提供で貢納を免除されたプエブロは貢納地区に編成されなかったことが指摘されてきたが（Carrasco 1996:348-351）、央盆地域南部のミアウァトランの場合、激しい抵抗もなくメシーカ遠征に協力し、コヨラパン貢納地区の貢納徴収官を通じて砂金を貢納するようになっていた。そのため、ベルダンらはこの地区を戦略地区に分類している。同じようにメシーカ遠征に先導役として協力したとされる地峡部の先住民ソケのイスウァトランは、近くに貢納徴収官駐留のプエブロがないため、非定期的な贈答品の提供に留まっていた可能性がある。こうした軍事的サービスや労働力、非定期的な贈答品の提供は、帝国に対する政治的従属を示すものであり、遠隔地交易商人の域内通行権を認知することも政治的従属と言っていいだろう。

マヤ地方へ向かうポチテカの主要交易ルートの分岐点に位置するテオティトラン・デル・カミーノ領主国は帝国と同盟関係にある独立領主国と見なされていたが、実際には貢納を納めていた。メシーカ大領主と婚姻関係による同盟関係を成立させていたテワンテペック領主国は、グアテマラ方面に向かうポチテカの通行権を認知することで、メシーカに政治的に従属していた。同時期にメシーカに征服された周辺のウァベ系のプエブロも、テワンテペック領主国を介して帝国と政治的従属関係にあったと思われる。そこで構築されていた征服プエブロと帝国の関係図式は、ミアウァトラン戦略地区で指摘されていた主邑と従属村の関係図式と類似したものとなっている。

アステカ帝国の版図の空白地区とされてきたテワンテペック地峡部に位置するプエブロの多くは、メシーカ大領主に対して多様な形で政治的に従属していたことは確実である。

注

1）貢納表や CM Ⅱに未記載の貢納地区として、「モクテスマにインディオが払った貢納に関する 1554 年の情報」で言及されているアパン（Apan）地区がある。現イダルゴ州に位置するこの貢納地区には貢納収税官駐留のプエブロは 5 つあったとされる（Rojas 1997:104）。

2）テスココ系史料としては『モトリニア覚書（Memoriales de Motolinía）』の「メシコ、テスココ、トラコパン貢納プエブロ（Pueblos que tributaban a México, Tezcoco y Tlacopan）」（Motolinía 1971:394-396）、トラコパン系史料としては『トラコパン帰属プエブロ覚書（Memorial de los pueblos de Tlacopan）』（Memorial 1944:118-122）が代表的なものである。

3）バーローの復原地図では、これ以外にもオアハカ州南西部のミステカ小領主国群（Señoríos

Mixtecos）や北西部のコマトリカヤック領主国（Señorío Coatlicamac）がある。

4）『トラコパン帰属プエブロ覚書』7-2 セクションの 70 プエブロのうち 17 のプエブロは、テオティトラン領主国に隣接の 5 貢納地区記載のプエブロとなっている（Carrasco 1996:439-449）。

5）テワカン貢納地区は、主邑以外にコシュカトラン（Coxcatlan）、テパンコ（Tepanco）、サポティトラン（Zapotitlan）、アシャルパン（Axalpan）など 8 プエブロで構成されていたとされる。上記一覧に記載のマサトラン（Maçatlan）、オウアトラン（Ohuatlan、現ワウトラ・デ・ヒメネス）など 7 つプエブロで構成されるテオティトラン領主国も戦略地区とみなしうる。

6）テオサポトランとテワンテペクとを結ぶ回廊の中間のネシャパ（Nexapa）、回廊北側のミヘ対策用の 1 カ所、南側のチョンタル対策用の 2 カ所に要塞があった（Burgoa 1674: II,315-316）。

7）先住民族ソケの居住地とされるイスウァトランは元々ウァベが先住者で、その後サポテコが居住したとされる。1586 年に当地を訪問したシウダー・レアル（Antonio de Ciudad Real）は、「ソケ、別名ミヘというインディオ」が居住と記録している（Ciudad Real 1993:I,179）。

8）ショチトランは現フチタン（Juchitán）、アマシュトランは現サン・フランシスコ・デル・マール（San Francisco del Mar）、イスウァトラン（Yzhuatlan）は現サン・フランシスコ・イスワタン（San Francisco Ixhuatán）に相当する地峡部のプエブロである。ショロトランに関しては場所を確定できないが、ソコヌスコ地方にあったと思われる。

9）このミアウァトランに関して、オアハカ中央盆地域南部のミアウァトラン（現 Miahuatlán de Porfirio Díaz）ではなく、地峡部にあったと思われるプエブロとする説をカラスコは提示している（Carrasco 1996:481-483）。

10）アナワク・シカランコ（Anaoac Xicalanco）がメキシコ湾岸側の地峡部を指すのに対し、アヨトラン・アナワクは太平洋岸の地峡部からソコヌスコ地方を指す。アヨトランはソコヌスコ地方最南端のグアテマラ領テクン・ウマンに当たる場所にあったとされる（Voorhies et al. 1989:81）。

11）アトランとオミトランは『トラコパン帰属プエブロ覚書』で常にマパチテペックとともに言及されているので（Memorial de Tlacopan 1942:120）、ソコヌスコ地方のプエブロと見なせる。

12）1499 年に地域で最多の人口をもつアメシュトロアパン（Amextloapan）を包囲、数千人殺害、捕虜 1.7 万確保とされるが（Ixtlilxochitl 1977:II,163,167）、このプエブロは地峡部に確認できない。

13）このモンテスマはメシーカ大領主全般を指す用語で、実際はアウィツォトルを指している。

14）ミステカ王も 2 万の兵を要塞の北側平原に配置し、メシコ兵士の骨や頭蓋骨を要塞に並べたという記述もある（Burgoa 1674:368-369）。この箇所のモンテスマもアウィツォトルを指している。この要塞がハラパとテワンテペックの中間にあるギエンゴラ（Guiengola）遺跡であることは明白である（Ramón Celis et al.2024）。

15）ブルゴアの記述にあるコシホエサはコシホエサⅡ世に当たる。当時のモクテスマ II 世（1466 年頃～ 1520 年）の年齢を考えると、コポ・デ・アルゴドン（ナワトル語名 Coyolicatztín、サポテカ語名 Pelaxilla）はアウィツォトルの娘（モクテスマⅡ世の従姉妹）だった可能性が高い。

16）カラスコはコヨラパン貢納地区のクアツォンテペック（Cuatzontepec）を地峡部のテペクアツォントラン、またはクアツォントランと見なした（Carrasco1996:436）。現在ではこの注記が誤読で、現ハリエサ（Jalieza）の旧名称メカテペック（Mecatepec）と解読すべきとされている。https://aztecglyphs.wired-humanities.org/content/mecatepec-mdz44r（最終閲覧 2025 年 11 月 15 日）

17）この時期のメシーカの征服活動に 1502 年に即位したモクテスマ II 世が既に関与していたので、クロニカ X 系年代記では彼の功績として記述している可能性が高く、クロニカ X 系年代記以外の史料ではシャルテペック征服はアウィツォトル統治期とされている。

18）イクパテペックはオアハカ州北西部のミステカ高地にあり、水量の豊かな川を挟んで対峙する構図は考えにくく、地峡部ラグナ地帯の先住民ウァベのクアツォントランの方がふさわしい。

19）サン・マテオ・デル・マール行政区の西端にウアサントラン・デル・リオ（Huazantlán del Río）があるが、この名称はサン・マテオ・デル・マールと改称された後に付いたものである。
20）バロスは、シャルテペックとケツァルテペックは雨季に水没する地区の多い熱帯雨林の広がる地峡部で年間を通じて唯一通行可能なルートがあった地区と指摘している（Barros 2007:334）
21）テソソモックはエメラルドや猫目石（huitziltetl）を挙げているが、ドゥランの『インディアス史』では宝石研磨用の砂も言及されている（Durán 1967:II,425）。
22）『チチメカ王国記』では、カカマツィン（Cacamatzin）のテスココ大領主即位後の 1516 年にシャルティアンキスコが征服されたことになっている（Ixtlilxochitl 1977:II,192）。
23）ブルゴアが Totôtepeque と表記した個所が何カ所もある。トトンテペックは「鳥の丘」ではなく、totonqui（熱い）+ tepetl（丘）を意味する（Bernal Alcántara y Molina Domínguez 2021:27）。
24）1580 年の「テワンテペック地理報告書」では絵図に示されたすべてのプエブロがテワンテペック領主の傘下にあったかのように記載されているが、絵図に描かれたプエブロの大半はテワンテペックから半径 50km の圏外に位置している。
25）グアソントランは干魚、テペグアソントランは石灰、イスタクテペックはエビをテワンテペック領主に納めていたとされる（González de Cossío 1952:373-374）。

Bibliografia

Acuña, René
1984 *Relaciones geográficas del siglo XVI: Antequera*. 2 vols., UNAM, México, D.F.

Barlow, Robert H.
1949 *The Extent of the Empire of the Culhua Mexica*. University of California, Berkeley and Los Angeles.
1990 “Las conquistas de Moctezuma II”. En *Obras de Robert H. Barlow*, vol. 3, INAH/UDLA, México, D.F. y Puebla, pp.97-128.

Barros, Alonso.
2007 “Cien años de guerras mixes. Territorialidades prehispánicas, expansión burocrática y zapotequización en el Istmo de Tehuantepec durante el siglo XVI”. *Historia Mexicana* 57, núm. 2:325-403.

Berdan, Frances, et al.
1993 *Aztec Imperial Strategies*. Dumbarton Oaks Research Library and Collections, Washington, D.C.

Bernal Alcántara, Juan Arelí y Jorge Molina Domínguez
2021 *Anyukojm-Totontepec.Historia y cultura mixe*. INPI, México, D.F.

Burgoa, Francisco de
1674 *Segundo tomo de la segunda parte de La historia geográfica descripción de la parte septentrional del Polo Ártico de la América.* Imprenta Juan Ruyz, México.
https://www.cervantesvirtual.com/obra/segundo-tomo-de-la-segunda-parte-de-la-historia-

geografica-descripcion-de-la-parte-septentrional-del-polo-artico-de-la-america-1232686/（最終閲覧 2025 年 11 月 15 日）

Carrasco, Pedro
1996　*Estructura político-territorial del Imperio tenochca. La Triple Alianza de Tenochtitlan, Tetzcoco y Tlacopan.* FCE/El Colegio de México, México, D.F.

Castillo Tejero, Noemí
2002　“Cartografía de sitios mencionados en fuentes históricas del área del Valle de Tehuacán, Puebla”, *Arqueología*, 27:63-72.

Ciudad Real, Antonio de
1993　*Tratado curioso y docto de las grandezas de la Nueva España*. 2 tomos, UNAM, México, D.F.

Códice Telleriano Remensis (CTR)
https://pueblosoriginarios.com/meso/valle/azteca/codices/telleriano/telleriano.html（最終閲覧 2025 年 11 月 15 日）

Códice Rios (CR)
https://pueblosoriginarios.com/meso/valle/azteca/codices/rios/rios.html（最終閲覧 2025 年 11 月 15 日）

Davies, Claude Nigel Byam
1968　*Los señoríos independientes del Imperio Azteca*. INAH, México, D.F.

Doesburg, Sebastian van
2022　*Conquista y colonización en Oaxaca*.UNAM, México, D.F.

Dibble, Charles
1942　“Códice en Cruz”, Tesis de Doctorado, UNAM. México
https://tesiunamdocumentos.dgb.unam.mx/ppt1997/0121183/Index.html（最終閲覧 2025 年 11 月 15 日）

Durán, Fray Diego
1967　*Historia de las Indias de Nueva España e Islas de la Tierra Firme*. Editorial Porrúa, México, D.F.

Gallardo Vásquez, Julio César.
2021　*Ja mejy jïts ja kojpk. Atlas de la conquista de la región mixe-zoque*. Colectivo Mixe, Oaxaca.

García Castro, René (ed.)
2013　*Suma de visitas de pueblos de la Nueva España,1548-1550*. Universidad Autónoma del Estado de México, Toluca.

González de Cossío, Francisco
1952 *El Libro de las tasaciones de pueblos de la Nueva España. Siglo XVI,* AGN, México, D.F.

Güereca Durán, Raquel E.
2025 *Tierra, poder y memoria: Analco, Oaxaca, siglos xvi-xix.* UNAM, México, D.F.

Ixtlilxochitl, Fernando de Alva
1977 *Obras históricas*. 2 tomos, UNAM, México, D.F.

Memorial de los pueblos deTlacopan
1942 "Memorial de los pueblos sujetos al señorío de Tlacupan, y de los que tributaban a México, Tezcuco y Tlacupan" en Francisco del Paso y Troncoso (ed.), *Epistolario de Nueva España*, Porrúa, México, D.F, vol. 14. pp.118-122.

Oudijk, Michel
2000 *Historiography of the Bènizàa: The Late Postclassic and Early Colonial Periods*. Research School CNWS, Leiden University, Leiden.
2007 "Una nueva historia zapoteca. La importancia de regresar a las fuentes primarias". En Sebastián van Doesburg (coord.), *Pictografía y escritura alfabética en Oaxaca*. Fondo Editorial del Instituto Estatal de Educación Pública de Oaxaca, Oaxaca, pp. 89-116.
2008 "The Postclassic Period in the Valley of Oaxaca: The Archaeological and Ethnohistorical Records". In Jeffrey P. Blomster (ed.), *After Monte Alban. Mexico*, University of Colorado Press, Boulder. pp. 95-118.
2019 *Cambiar para seguir igual. La fundación y caida del cacicazgo de Tehuantepec (siglo XV y XVI)*. UNAM, México, D.F.

Oudijk, Michel and Maarten Jansen
2000 "Changing History in the Lienzos de Guevea and Santo Domingo Petapa". *Ethnohistory*, 47 (2) pp.281- 331.

Ramón Celis, Pedro Guillermo, Itzel Chagoya Ayala y Mario Alberto Soto Fuentes
2024 "Tras las huellas del estado zapoteco en vísperas del contacto europeo: Estudio de un palacio en Guiengola, Tehuantepec". *Cuadernos del Sur*, No. 56, pp. 25-52.

Rojas, José Luis de
1997 *Información de 1544. Sobre los tributos que los indios pagaban a Moctezuma*. CIESAS, México, D.F.

Sahagún, Fray Bernardino de
1988 *Historia general de las cosas de Nueva España*. 2 tomos, Alianza Editorial, Madrid.

Tena, Rafael
2004 *Anales de Tlatelolco.* CONACULTA, México, D.F.

Tezozomoc, Hernando de Alvarado
1977　*Crónica Mexicana*. Historia 16, Madrid.

Trejo, Leopoldo
2004　*Los que hablan la lengua. Etnografía de los zoques chimalapas.* INAH, México, D.F.

Velázquez, Primo Feliciano
1975　*Códice Chimalpopoca. Anales de Cuauhtitlan y leyenda de los soles.* UNAM, México, D.F.

Voorhies, Barbara (ed.)
1989　*Ancient Trade and Tribute. Economies of the Soconusco Region of Mesoamerica*. University Utha Press, Salt Lake City.

Zeitlin, Judith Francis
2005　*Cultural Politics in Colonial Tehuantepec. Community and State among the Isthmus Zapotec, 1500- 1750*. Stanford University Press, Stanford.

ISSN 2759-0542

BOLETÍN del

Centro de Estudios Latinoamericanos
de la Universidad de Estudios Extranjeros de Kyoto

Centro de Estudos Latino-Americanos
da Universidade de Estudos Estrangeiros de Kyoto

2025

‹ARTÍCULOS›

La expansión y integracion territorial de los mexicas en el Istmo de Tehuantepec
..... Munehiro KOBAYASHI 1

A literatura nordestina do Brasil e a figura feminina resistente: através do romance *São Bernardo*, de Graciliano Ramos
..... Masayuki KIBE 23

‹ESTUDIOS PRELIMINARES›

Presentación de literatura relacionada con las relaciones interamericanas en torno a la Doctrina Monroe en el Japón de la preguerra
— De la Doctrina Monroe al Panamericanismo —
..... Toyoharu TSUJI 43

Los museos comunitarios y la política museística en Centroamérica: comparación de los casos de Nicaragua y Costa Rica
..... Asuka SUGIOKA 59

‹NOTAS DE INVESTIGACIÓN›

Daños al Patrimonio Arqueológico y su Tratamiento Sancionador: análisis del DS N°005-2019-MC
..... Hironori OTANI / José Antonio ONOFRE MAYTA 77

‹RESEÑA DE LIBROS›

American Empire: A Global History, por Anthony Gerald Hopkins (Kan Hideki, Mori Takeo, Nakajima Hiroo y Kami Hideaki tr.)
..... Takashi USHIJIMA 101

Vol. 25